

ヘイマエイ島——人と火山の戦いの跡を訪ねて

下川 和夫

アイスランドの南一〇キロの海上に、一五の島と多数の岩礁からなるヴェストマン諸島(Vestmannaeyjar)がある。その中で最大の島がヘイマエイ島(Heimaey)である。最大とはいっても面積が一三・四平方キロだから、阿寒湖の面積とさほど変らない程の小島である。しかしヘイマエイの名は、一九七三年の火山噴火によって一躍世界に知られることになる。

同年一月二三日の深夜に始まった大噴火は、六ヶ月にわたって総量〇・二五立方キロにのぼる溶岩やスコリアなどを噴出させ、四〇〇戸の住宅が流出した溶岩に埋没・焼失し、あるいはスコリアの重みで倒壊するという大被害をもたらした(Scudder, 1990)。

溶岩の流出による火山災害は、火山国日本といえどそれほど例は多くない。一九一四年(大正三年)、全壊家屋一二〇戸を出し、溶岩流によって大隅半島と陸続きとなった桜島の噴火災害、全島民が長期にわたり島外に避難するという事態を招いた一九八六年の三原山の噴火などに限られるが、その中で多数の住宅が溶岩に呑み込まれた一九八三年の三宅島噴火は記憶に新しい。その時の噴出物の総量が〇・一二立方キロ(熊谷ほか、一九八四)であったから、ヘイマエイでの噴出量はその二倍である。また三宅島で溶岩に埋没した民家の戸数三四〇棟と比較しても、災害の規模でもうわまわった。しかしそれ以上に、この島がアイスランドの経済にとって極めて重要な位置にあったことを

考えると、三宅島の場合とは比較にならない程の大問題であった。

地下資源に乏しく、地熱を使った温室栽培によってトマト、キウリ、花卉などの生産が行なわれてはいるが、寒冷なため農産物の自給がままならない同国にとって、漁業は生命線である。そのアイスランドのなかでもヴェストマン諸島は、漁業面で最も重要な地位にある。島の人口はアイスランド全体の一・九パーセントに過ぎないが、同国の漁業輸出高の一五パーセントをも占めている。ちなみに噴火による被害総額二百億円は、当時のアイスランドのGNPの一〇パーセントにも達したといわれ、その後長期にわたるインフレの原因となった。

総人口二五万人の小国に過ぎないアイスランドではあるが、一人当たりの国民総生産は世界で四位(一九八七年)と高い。かつてニシン・タラの好漁期には、国民所得世界一位を誇った時代もあった。高い生活水準を支えて来たのは、周知のとおり漁業である。アイスランドの魚は中東諸国の原油に相当する。第一次産業を基盤とする国が一律に発展途上国とする考え方が誤りであることはアイスランドの例を待つまでもない。

一九七六年には自国の漁場を守るために、完全非武装国家であるゆえに沿岸警備艇だけで、果敢にも大国イギリスのフリゲート艦と衝突した、いわゆる「タラ戦争」を展開したことも、アイスランド経済にとって漁業がいかに重要な経済基盤であるかを如実に物語っている。

そのヴェストマンの街と港がまさに溶岩とスコリアに埋めつくされようとしていたのである。住民と溶岩の熾烈な戦いは半年にもわたって繰り返られた。

学生時代、民家の至近距離で溶岩が噴き上るヘイマエイの噴火の様子をテレビの画面で見て、鳥肌の立つような感動を覚えたものである。あれから二〇年、アイスランドを訪れる機会が巡ってきた。

五年前から北極圏のスピッツベルゲン島で地形の共同調査を実施して来たが、今年はその最後の年にあたる。同地で約二週間の調査を終えた後、ノルウェーのロフオーテン諸島、スウェーデンのラップランドなどを回り、アイスランドは最後の訪問地に決めていた場所である。三日後にはノルウェーのトロムソで別れた明治大学の大学院生長谷川裕彦君と北海学園大学の高橋伸幸氏がアルプスで登山を楽しんだ後、



ヘイマエイ島
島北東部の露岩の記号部分が1973年の溶岩流

レイキャヴィークで合流することになっている。その後はレンタカーを借り、アイスランド本島の「火と氷」を気の向くまま見て回ろうという計画である。それまでの数日間を利用してのヘイマエイ訪問である。

アイスランドへ来た目的のひとつがヘイマエイに渡り、二〇年前の火と人との戦いの跡をこの目で確かめることであった。

ヘイマエイへ

一三人の乗客を乗せたビーチクラフト機がレイキャヴィーク空港を飛び立つと、眼下にはコケに覆われた緑灰色の広大な溶岩原が地平線まで広がる。レイキャヴィークの位置するアイスランド中央部は、島の中でも最も火山活動の活発な地帯である。教科書でしか見たことのないような新鮮な溶岩じわ、溶岩堤防に圧倒され、夢中でカメラのシャッターを切る。

雲間から本島の海岸線が見え、海上に出たかと思う間もなく、斜め向いの座席のドイツ人夫婦がカメラを構えながら右前方を指さし、「スルスエイ（スルツエイ）が見える」と教えてくれる。低くたれこめた雲間から見え隠れするその島は、一九六三年から四年間続いた噴火によって新しく生れた陸地である。その左側、ちょうど飛行機の進行方向にはパイロットの頭ごしに、目的地ヘイマエイの尖峰群が見え隠れしはじめていた。

ヴェストマン諸島の中心ヘイマエイ島へは、レイキャヴィークから二つの航空会社が一日数便の定期便を飛ばしているほか、本島南岸のソルラウクスヘブン（Þorlákshöfn）からはフェリーが毎日就航している。レイキャヴィークから飛行機だと約二〇分、フェリーならソルラウクスヘブンまでバスで五〇分、フェリーで二時間半、計三時間半程を要する。今回は時間を節約するため、飛行機を使ってヘイマエイ



南方上空から見たヘイマエイ島

島の大半は約5000年前にヘルガフェットルの噴火で形成された溶岩台地、北端の尖峰群は最終氷期の卓状火山である。遠景にアイスランド本島が見える。

—アイスランド市販の絵葉書より—

に入ったが、料金は往復五千アイスランド・クローナ（一アイスランド・クローナ＝約二・五円）で、バスとフェリーを乗り次いだ場合の一・五倍程度である。アイスランドの道路は整備が遅れていて、国道といえど未舗装区間が延々と続き、内陸に入れば川には橋がないのが普通である。逆に小型飛行機による空のネットワークが発達してお

り、遠距離移動には安く便利である。

飛行機は島の北西から島に近づき、ヒッジが草をはむダールフィヤットル（Dalífall）の急崖をかすめるように侵入すると街の上で旋回し、島の中央部の空港に静かに着陸した。

ヘイマエイ島は、その北端部に乱立する切り立った岩山と、島の中央に位置するヘルガフェットル（Hafnartell）火山を中心として四方に緩やかに傾斜する台地という二種の地形からできている。前者は最終氷期の卓状火山が開析されたもの、後者は約五千年前のヘルガフェットルの火山活動で流出した溶岩流が造った溶岩台地である。この二つの対照的な地形が島の景観を変化に富んだものになっている。

島の名の由来と歴史

アイスランドは九世紀にヴァイキングの移民によって拓かれた新開地である。それまではアイルランドの隠遁者が一時的に住みついたことはあったが、事実上全くの無人島であったらしい。

ノルウェーの沿岸部で農業・漁業・牧畜業などを営みながら、時として遠征して交易・略奪を行っていたスカンジナビア人、いわゆるヴァイキングは造船技術上の革命ともいわれる竜骨（キール）を持つ船を世界で初めて作ったことでも知られるように航海術に長けていた。竜骨の発明は船幅を広げ、その安定性から帆走が可能になった。このことがその後ヴァイキングの活動範囲を広げることになる。熊野（一九八三）によれば、ヴァイキングという語の本来の意味は、スカンジナビア人が略奪に出かける行為を指すのだという。八世紀末から九世紀初頭にかけてオークニー、シェトランド、フェロー等の島々へ移住・植民が行なわれ、ヴァイキングはそこを起点にスコットランド、アイスランドへ略奪行（ヴァイキング）を行っていた。

そのような時期、ノルウェーからフェロー諸島へ行こうとしたナッ

ドッズというヴァイキングがアイスランドに漂着し、スネーランド(雪の島)、つまり現在のアイスランドが発見される。

伝承によれば、最初にアイスランド定住に成功したのは、ナッドズの漂着からしばらくたった八七四年、ノルウェーからやって来たヴァイキング、インゴールヴ (Ingólfur Arnarson) とヒョルレイヴ (Hjörleifur Hrómarsson) の乳兄弟のグループであった。この成功をきっかけに、ハーラル美髪王の王政と人口過剰という誘因が働き、ノルウェーからアイスランドへの移住ブームがおきた。何と五〇一六〇年でアイスランドは植民されつくし、九三〇年には早くも民主議会アルシングが開催されている。ヴァイキングはアイスランドから、さらにグリーンランドへ移住、そしてコロンブスに先んじること五百年、十世紀の末にはラブラドルやニュー・ファウンドランドに到達することになる。

ちなみに一九八九年度版のアイスランドの地質図では、A・D・一〇〇〇年を境に新旧の溶岩が区分されているが、これはアイスランドがエクメネ化された八七四年を基準とした溶岩の時代区分である。

ところでヴェストマン (Vestman) とは英語で west man の意であるが、島の名のおこりはこうである。

インゴールヴとヒョルレイヴらは、アイスランド人やイングランド人を奴隷として連れてきていた。ところがヒョルレイヴが彼らに殺された。牛の代りに奴隷に犁を曳かせたために反乱が起こったのである。復讐のため奴隷を追い求めていたインゴールヴはヘイマエイ島で彼らを見つけ殺してしまう。当時アイスランド人やイングランド人は west-men (西から来た人々) と呼ばれていたために、これが島の名前になったとされている。

その他奴隷のヘルギ (Hergi) が殺された場所が島の中央のヘルガフエットル (Helgafell) 火山 (fell は hill または small mountain の意) の名に、奴隷のリーダー Dufþakur が捕えられようとして海に身を投じた崖

が島の北部の Dufþekja という急崖名に、当時の事件はヘイマエイ島の地名に残されている。

島の北西部ヘルヨウルフスダールル (Hirðisdalur) における発掘調査によれば、ヘイマエイにはアイスランド本島より少し早くから、すでに人が住んでいたことが知られている。ヘルヨウルフスダールルの名は最初の移住者 Herjólfur Bárason に由来するといわれている。このカール状の谷は島で唯一真水の得られる所であり、三方を急な岸壁に囲まれているので、常に吹き荒れる強風を避けるには最適の場所でもある。

ヘイマエイの冬の平均気温は一・九度でアイスランドの中では最も高く、天然の良港とあわせ豊かな漁場を控えていることもあって、人が住むには格好の島だったようである。

街はずれの空港から、強い東風を受けながら街の方向に向かって歩き始める。テント、シュラフの類はレイキャヴィークのキャンプ場に残してきた。まずは宿を探さなくてはならないのだが、つい足は奴隷のヘルギが殺されたと伝えられるヘルガフエットルに向いていた。地理屋の習性として、初めての訪問地ではまず高い所に登り、一帯を鳥瞰したくなるものである。

ヘルガフエットルの山腹を登って行くと、ムナグロが「キビョ キビョ」と短く鳴いて誘うように周りを歩きまわる。近くに巣があるのだろう。この鳥はアイスランド航空の時刻表の表紙を飾っていたが、アイスランドの代表的な鳥なのだろうか。

ヘルガフエットルの中腹から東を見下せば、一九七三年の火口列がエルトフェットル (Eldfell) から南へ一直線に延びている。この時の噴火では大地が二つに割れ、線上に並ぶ多数の火口から溶岩が激しく噴き出した。火山学の用語でアイスランド式と呼ばれる噴火のタイプ、「割れ目噴火」であった。

広がる変動帯

アイスランドの噴火は、突然大地が裂け流動性の高い灼熱の溶岩が噴水のように噴き出すのが常である。「火のカーテン」とも形容される噴火様式は、アイスランドの置かれた地球上の位置と関係が深い。

プレートテクトニクスの考え方によれば、地球の表面は十数枚のプレートと呼ばれる地殻に分割されている。それらのプレートは個々に水平移動を行っており、したがってプレート同士がすれちがったり離れていたり、ぶつかりあったり、というような、場所によって異なった相対運動が生じる。アイスランドは、北アメリカプレートとユーラシアプレートの二枚のプレートの境界にあって、これらのプレートが互いに両側へ離れて行く場所、つまり大西洋中央海嶺の延長上に位置している。中央海嶺はマントルから溶岩が供給され大洋底地殻が生成される場である。大西洋中央海嶺の北の延長は、レイキャネス海嶺を通り北極海に至る。したがって海嶺はアイスランドを横切ることになる。レイキャネス海嶺で両プレートが拡大して行くスピードは、一年に二センチ、アイスランドの中央帯北部で〇・二〜二センチといわれる(中村ほか、一九七三)。つまりアイスランドの大地は、毎年数ミリから数センチの速度で裂け、広がりつつある場所ということになる。大地の裂け目はアイスランドでギャウ(gjá)と呼ばれる。大地に働く張力が地殻を裂き、割れ目噴火となるのである。アイスランドは地球上で唯一、地殻生成の現場が陸上にあらわれた場所なのである。

一九七三年の噴火

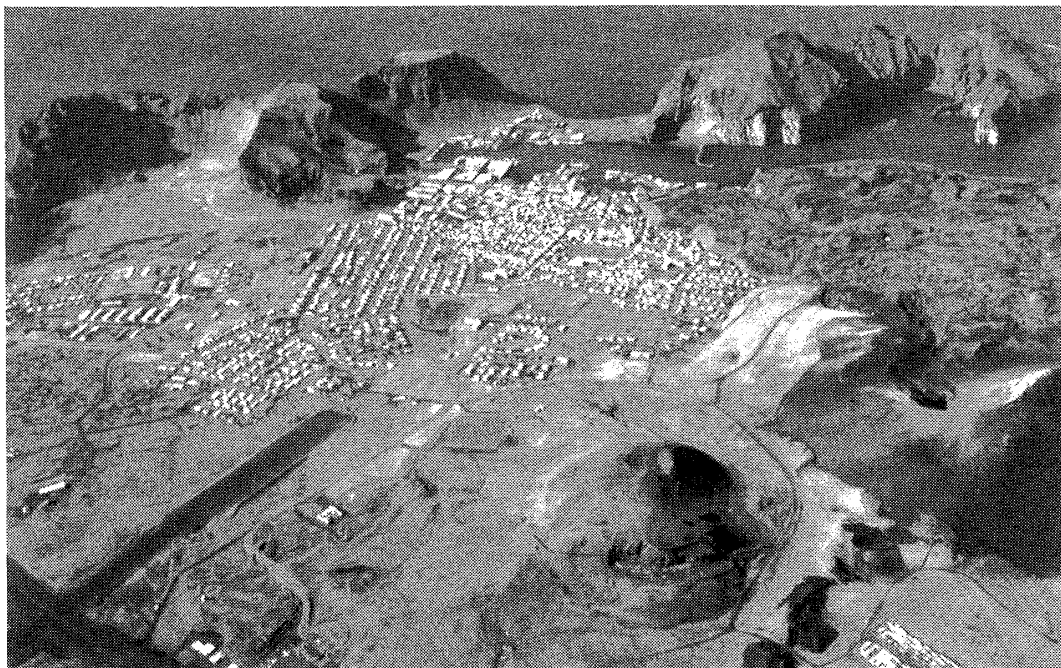
一九七三年一月二三日午前一時五五分、噴火はヘイマエイの街の東端、キルクユバイル(Kirkjubæjar)教会のある村の意)の集落から僅か二百メートルのところで始まった。アイスランドの噴火でこれほど街の近くで起こった例は知られていない。目撃者によれば、最初枯れ草

が燃えているようだったという。噴火が始まるまで、はっきりとした微動は全く感じられなかったという。

突然大地が両側へ開き、火山灰、スコリアとともに溶岩が激しく噴出した。割れ目はまたたく間に千六百メートルに延び、割れ目からは百メートル以上もの高さにまで灼熱の溶岩が噴き上げられ、夜空に「火のカーテン」が引かれた。溶岩の流出は毎秒百立方メートルに達し、北西と東に向って流下した。割れ目噴火は多くの場合そうであるが、しばらくすると活動がいくつかの火口に限定される。ヘイマエイでも噴火から十時間後には割れ目の南三分の一は活動を止め、四日目には割れ目の中心近くにスコリア丘が姿を現わしていた。新火山の誕生である。

この噴火は、ほとんど民家の庭先ともいえる程の至近距離で始まった。日本ならこのような危険な場所に街が作られることはない。わが国の火山の大多数は複成火山であるため、噴火の場所は中央火口と大体相場は決っている。危険な火口の近くに人は住まない。ところがアイスランドの火山はそのほとんどが単成火山であるため、一度噴火した場所では再噴火しない。言いかえれば、今まで噴火のなかったところで活動が開始されるというのが普通である。わが国での唯一ともいえる例外は、麦畑から噴火が始まった昭和新山であらう。昭和新山も単成火山である。

この噴火は約五千年前のヘルガフェットルの活動を最後に長いこと静穏だった同島の島民にとって、まさに寝耳に水であった。すぐに避難が開始された。前日海が荒れていたため漁船が港に帰っていたことが幸いした。警察、消防、レスキュー隊などの二〜三百人の要員を残し、全住民が船と航空機で本島へ避難した。五千三百人の島民が避難するのに僅か四時間。一人のけが人もださず、避難は夜明けまでに完了していた。暗闇の中、避難活動がスムーズにいったのは、あらかじめ国によって避難計画が立てられていたからだといわれる。



ヘイマエイ島の北部

中央手前にヘルガフェットル（226m）、その右が1973年の噴火で生じたエルトフェットル（221m）。その北側には街と港に流れ出した溶岩が黒く見える。エルトフェットルの手前は南へ延びた火口列、左下には飛行場が見える。

—アイスランド市販の絵葉書より—

北西へ向った溶岩はやがて街に迫り、噴火三日目にはついに住宅が溶岩で焼かれ始め、最初の一週間で百戸の家屋が溶岩にのまれた。そして最終的には四百戸の家屋が溶岩に覆われ、あるいはその熱で焼失した。島の全家屋数千三百四十五戸のうちの三割あまりが失われたこ

とになる。

水冷作戦

北東部の住宅を埋め、街の中心に迫っていた溶岩流は、一方で港の入口を閉塞する恐れがあった。アイスランド有数の漁港の危機である。溶岩の流下を阻止しなくてはならない。

かつてイタリアのエトナ、ハワイのマウナロアなどの火山では、溶岩の流路を変えたりくいとめるために、様々な方法が試行されている。堤防や誘導溝などの構築、ダイナマイトによる爆破、はては爆弾の投下というような乱暴や方法まで試され、試行錯誤が続けられてきた。

ヘイマエイでは海岸に近いという好条件を生かし、海水を溶岩に散布して冷やすという方法を取るようになった。

溶岩は温度を下げることで流動性が低下する。この方法は一九六〇年、ハワイのマウナロアで試みられたことがあったし、十年前にはヘイマエイの隣り、スルスエイの噴火の時に小規模ではあったが試され、成果をあげていた。しかし大規模な試みは今回が初めてであり、その成否は世界の注目を集めることになった。

二月末に実験が行なわれ、その効果が確かめられると、いよいよ本格的な水冷作戦が開始された。アメリカ合衆国から購入された大型のポンプがハーキュリーズで空輸され、船上に積まれた四七台のポンプから毎秒〇・九トンの海水が放水された。さらに溶岩の前面だけでなく、流動する溶岩上に散水しながらブルドーザーで道が付けられ、プラスチックパイプが敷かれると溶岩の上面からの散水も行なわれた（中村、一九八一）。同時に溶岩の流れを変えるため、ブルドーザーでスコリアをかき集め、堤防づくりも行なわれた。

溶岩流は散水によって明らかに速度を弱め、やがて停止した。こうして街と港は壊滅的被害をまぬがれた。散水が有効であったことは溶岩の末端が急崖となって終わっていることが証明している。冷えた溶岩

自体が強固な堤防として機能した訳である。「焼け石に水」のたとえがここでは覆されたのであった。東へ向った後続の溶岩は海に流入し、これによって島には新たに二・二平方キロの陸地が付け加えられることになった。

人々が新スコリア丘で最後の噴火を見たのは七月二六日。この日が半年あまり続いた噴火の最終日であった。噴火によって生れた高さ二二メートルの新しい火山は、エルトフェットル、つまり「火の山」と名付けられた。

街の劇場では噴火災害の記録映画「Days of Destruction」が四月から九月の間の毎日上映されている。ヘイマエイの噴火の様子は、日本のテレビでもドキュメンタリー番組で何度となく放映されているが、



街に迫った溶岩流

北東へ向かった溶岩流は400戸の家屋を呑み込んだ。

映画は全く別のフィルムであり、いくつかのコンクールで金賞を取っているだけあって迫力があり、新鮮な感動を与える。

街の再建―たくましい島民たち

災害後、街は見事に再建された。壊滅的被害から立ち直った島の人々のエネルギーには敬服してしまおう。しかしヘイマエイの社会は、過去にも破局的困難を克服してきたことが島のホテル、ソルスハーマル(Porshamar)で編集・発行している小冊子に紹介されている。

一六二七年七月、モロッコから突然トルコ人の海賊が島を襲った。彼らは島の南部に上陸すると、三方向から街に侵入してきた。そして無防備だった住民のうち三六名を殺害し、二四二人の男女を捕虜とした。捕らえられた島民はモロッコへ連れていかれ、奴隷として売られたといわれる。殺された者の多くは奴隷として価値のない老人と子供であったという。人々は崖の洞窟に隠れたが、海賊は容赦なく鉄砲の弾をあびせかけ多くの人が弊れた。助かったある少女のスカートには一四もの弾丸の穴があいていたという。

この事件で島の人口はその半数を失ったが、それは五百人の小社会にとって壊滅的出来事であった。人口の回復にはその後長い年月を要した。

破滅的な人的被害から立ち直ったヘイマエイの人々は、それから二百五十年後、今度は火山という外力に見舞われ、物的、経済的大打撃を受けることになった訳である。しかし、元来勇猛果敢なヴァイキングの子孫は、ヘイマエイの厳しい自然のなかで、さらに忍耐・勤勉さが培われていた、とその小冊子は鷗っている。住民は噴火後続々と島に戻ってきた。そして一九八〇年には四千三百人に、現在は四千八百人にまで島の人口は回復している。

世界各地から駆けつけたボランティア、国際赤十字、NATOのケブラヴィーク(Kellavik)基地などの援助によって、島の人々は精力

的に復興につとめた。厚いところでは五メートルにも及ぶ噴出物の除去が、人海戦術によって進められた。港の対岸ヘイマクレフトル(Heimaklettur)の山頂にいたるまで、子供たちがスコリア・火山灰を除去するという程の徹底ぶりであった。そして今では溶岩流の末端で半分埋もれた家屋や壁の一部、地表に顔を出した民家の煙突などが何箇所かで見られるだけで、街中を歩いても噴火の痕跡を見ることはほとんどできない。街の西部にはスコリアを捨てた跡に新たに宅地が整地され、羨ましい程大きく、瀟洒な家がゆったりと立ち並んでいる。



溶岩に埋没した民家
煙突の先だけが顔を出している。

島の人々は街を単に再建するというより、むしろ新たな街作りのためにこの噴火を積極的に利用したともいえる。ヘルガフェットルの砂利取り穴は景観保護の為にスコリアで埋め戻され、建材不足で遅れていた空港の二本目の滑走路建設には、排除したスコリアが利用さ

れ完成した。じゃまなはずの火山噴出物は、ここでは地底からの思わぬプレゼントとなった訳である。

さらにまだ十分に熱をもった溶岩は、街の集中暖房の熱源として利用されている。噴火以前にはほとんどの家庭で石油をエネルギーとしていたが、新たに溶岩の熱を利用した熱循環システムが考案され、二四時間あたり最低でも三百トンの温水を利用することができた。このシステムは、パイプを通して水を熱い溶岩の中に注入し、温水にして取り出すという方法で、温水は街中に分配されている。噴火後すでに二十年を経過したが、溶岩の余熱は今後さらに十～二十年は利用できる見通しとのである。

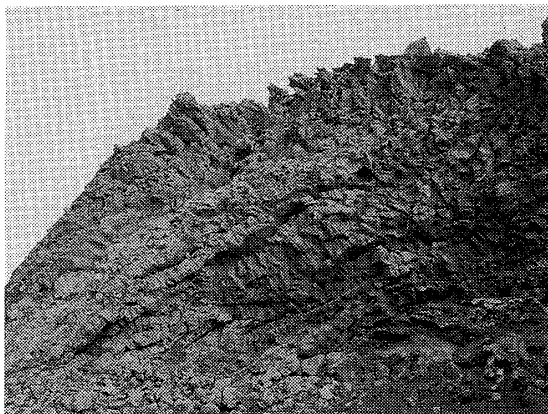
その他、噴火がもたらした恩恵がいくつかある。初期の頃には、強風が吹くたびにエルトフェットルと溶岩流から火山灰が飛んできて住民を困らせたが、土壌をかぶせその上に草の種を蒔くという手間のかかる方法で緑化が進められてからは、むしろ住宅地より四十～八十メートルも高い溶岩は、強い東風から街を守る防風壁の効果があることがわかった。街の人はこの山のおかげで木や牧草の生長が良くなったと言う。おそらく塩害の影響が減ったためであろう。さらに溶岩流が港の入口の海を埋め立てたことで、港は今までより奥ゆきが深くなり、一層の良港と変った。

そして島にとって最大の贈り物は、新しい陸地であった。火山島は海食によって徐々に小さくなっていく。一九六七年に生れたスルスエイ島は、その後の波食によって、すでに〇・八平方キロも小さくなっている。新たに得た二・二平方キロの土地は、小さな島にとって大きな財産となった。

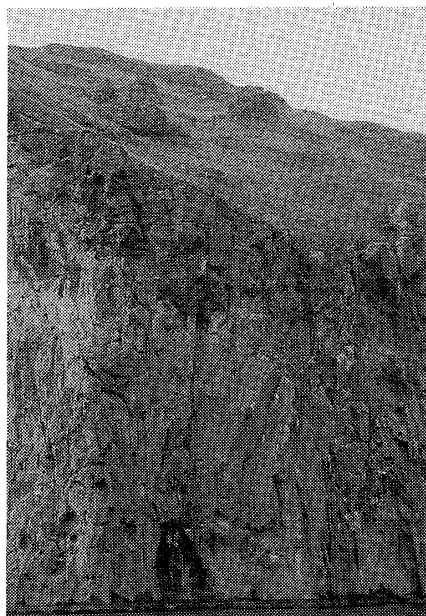
噴火という災害を乗り越え、ヘイマエイの人々はむしろ災いを福に変えることに努めてきた。噴火によって多くのものが失われたが、逆に得たものも少なくなかったのである。

パホイホイ溶岩

港の近くのレストランで昼食を終えると、小雨がぱらつくなか港の入口の溶岩流の末端を見に行く。鉛色の空はスッピツベルゲンやロフオーテンなど高緯度地方の海岸で見てきた空の色である。



港に迫ったパホイホイ溶岩の断面
厚さ数10センチのフローユニットが積み重なっている。



港の入口から見たヘイマクレフトルの断崖
100mを越える岩壁は海鳥の営巣地となっている。上部の草原には羊が放牧されている。

溶岩流の末端は急崖となって海に迫っているが、引き潮のため顕われた狭い浜を歩くことが出来る。波の侵食で洗い出された溶岩の断面には、見事な流理構造が発達していて、灼熱状態で流れる様子を想像するのに難くない。

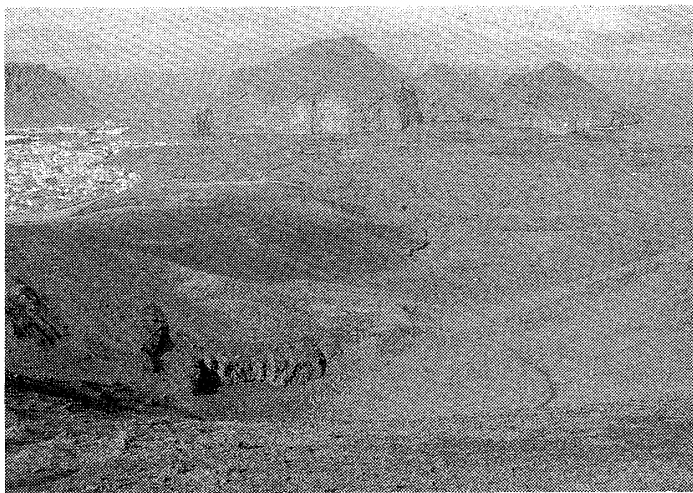
防波堤の先で溶岩は海に流れ込み、港の入口の幅を以前の半分に縮めた。対岸のヘイマクレフトルの百二十メートルもある絶壁までの距離が半分になり、海鳥の営巣地を間近に望めることができる。岸壁に発達する岩穴にはカモメ、ウミガラスなど海鳥のコロニーがあつて、すこぶる賑やかだ。南極で見たおびただし数のペンギンからなるルッカリリーといい、極北のことといい、無数の陸上生物を支える冷たい海の生産力の高さを改めて実感する。

波が外海に面した溶岩を砕き、潮流が削り取った物質を港の入口に堆積させるため、浚渫は噴火後欠かせない大切な作業となった。今も防波堤近くでは、大きなドレッジを持った浚渫船が活躍している。噴火で奥ゆきが深くなったとはいいが、港口の維持には思わぬ手間がかかるようだ。

翌朝、雨はあがったものの東風が吹き荒れていた。ホテルが気をきかせたつもりで揚げた日の丸の旗が、部屋のすぐ外ではためいてうるさい。早々に目が醒めてしまった。

西側からエルトフェットルに登った。山腹までは緑化事業が成功して、すでに草におおわれた斜面に変えられている。しかし中腹以高はザクザクのスコリアで歩きにくい。立派な火山弾がここかしこにころがっているのだが、残念なことに持ち帰るには大きすぎるものばかりである。

山頂には数百メートルの火口が北に向って口を開いていた。東からの強風に飛ばされてくる細かいスコリアの粒が身体にあたる。溶岩は主としてこの火口から放出され、北と北東へ向って流下したのである。



エルトフェットル山頂から北方を望む

山頂には直径数百mの火口があり、溶岩は北に向って流れ下った。北西へ流れた溶岩は街を襲い、東の溶岩は海へ流入した。正面の高い山が島の最高峰ヘイマクレフトル（283m）、その右はYstiklettur（209m）。

頂上からは踏み跡をはずれ、スコリアにおおわれた東斜面を真直に下ってゆく。溶岩を覆った緑灰色のコケが薄日を受けて蛍光色に輝いている。日本の火山の常識では、溶岩がたったの二十年でこんなにコケに覆われるとは考えられない。最初はもっと古い時代の溶岩かと思っただけである。逆にスコリアがかぶった斜面には植生の侵入はほとんどなく赤茶けていて、両者の色調は対照的である。スコリアは透水性が高く、乾燥気味で植物の侵入が難しいのに対し、溶岩は降水、霧を受け止めコケの生育を可能にしているのであろう。その極だった例が溶岩原に散在するスコリアのホーニトである。周囲の溶岩が一面コケに覆われているのに対し、ホーニトの部分は赤褐色のままでコケの着生が一切ない。したがってアイスランドでは、溶岩の新旧は植生からだけでは簡単には判断できない。ヘイマエイでは降水量は決して



エルトフェットル東麓の溶岩流

緑色のコケにおおわれた溶岩流の表面にはプレッシャーリッジ、陥没谷、溶岩じわなど、様々な微地形が見られる。左上方には地熱利用のプラントが作られている。

多くないのだが、降水日数は二百日にも及ぶ。霧日数も多いはずだ。海洋性気候のため年間を通して多湿なのである。

溶岩原の上に下り立つと、数センチの厚さのコケの上を歩くことになる。表面には溶岩が冷却してゆくとときにできる溶岩じわや堤防状の高まりが発達しているばかりではなく、溶岩裂目や陥没溝など、溶岩上のいわばクレバスが縦横に走っている。狭い割れ目はコケでふさがっているし、またリッジ状の高まりの部分では地下に空洞ができていることが多く、踏み抜かないように細心の注意が必要である。コケに

おおわれているとはいえ、溶岩上の微地形は灼熱の溶岩が流れる様を想像させるに充分である。

直径四メートル、長さ十数メートル程の溶岩トンネルが口を開いていた。溶岩の表面が固結した後、内部の溶岩が流れだしてしまうと、溶岩トンネル（溶岩チューブ）と呼ばれる細長い空洞が形成される。富士山麓に見られる「風穴」と同じものである。トンネルの内壁には溶岩の流れが美しい縞模様を残している。流動する溶岩が抜けてトンネルが出来た直後であろうか、まだ充分に固結していない厚さ数センチの溶岩のシートが壁からめくれ落ちたものが、洞窟の床にジュータンのひと巻きを放置したように残されていて面白い。天井や壁からは溶岩鍾乳石が垂れ下っていて、見あきることはない。

これらパホイホイ溶岩が見せる様々な造形は、日本の珪酸分の多い

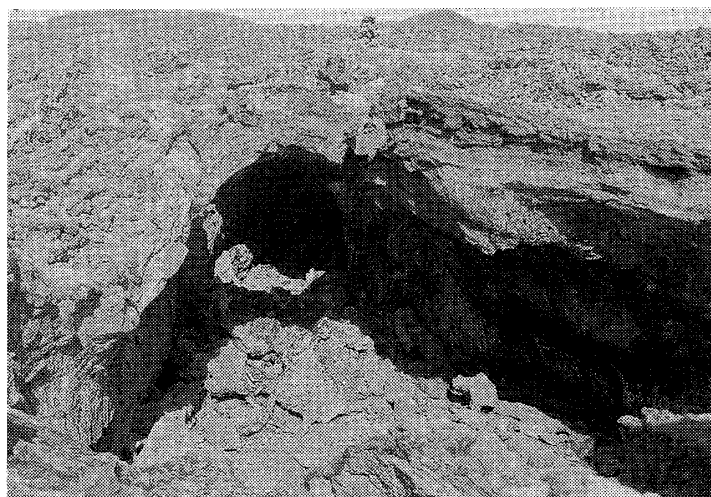
溶岩ではめったに見られない現象である。夢中になって歩き回っていたら、時間はあっという間に過ぎていった。

ホテルへ戻ると、レセプションで「日本の本が読みたければ沢山あるぞ」と妙なことをいう。時々日本の船が魚の買い付けにやってきてこのホテルに滞在するのだそうである。本は次に来る時のために彼らが預けていったものである。日章旗もその時に歓迎の意味で揚げられるのであろう。日本人観光客ははおろか日本の影すらも感じられなかったのに、北の孤島も日本経済とは無縁ではないのである。そういえば四年前に南極に行く途中立ち寄ったチリのバルパライソにも、魚の買付けのために日本船が入港していたし、サンチャゴの市場で突然「ウニ ウニ」と魚屋の主人に日本語で声をかけられ、びっくりしたことがある。日本の食卓が世界最北端の国アイスランドから最南端のチリにいたるまで、全世界に依存しているのは周知の事実で今さら驚くには値しないのではあるが。

パフィン

ヴェストマン諸島は海鳥の楽園である。観光客の多くが一九七三年の噴火跡とともに、海鳥のコロニーを見学することになる。島にはアイスランドのどこよりも多い一五種の子鳥が営巣しており、マン島ミズナギドリ (*Mann Shearwater*) とウミツバメ (*Storm Petrel*) は、アイスランドではこの島だけで営巣が確認されている。

数多い海鳥のなかでパフィン (*Fratercula arctica*) は、その愛敬のある顔形、体型のため人気があり、島のシンボルにもなっている。日本のツノメドリ (*Fratercula corniculata*) と近縁種で、素人目には全く区別がつかないほど似ている。ツノメドリは北海道の一部に冬鳥として飛来するが数は少ない。同じウミスズメの仲間であるエトピリカの繁殖地で繁殖期に数回の観察例があるだけで、日本では稀な鳥であ



溶岩トンネル

溶岩流の表面が冷却されても内部はまだ高温で融解状態にあると、表皮を突き破って溶岩が抜け出し、トンネルが形成される。内壁には溶岩鍾乳石、擦痕が見られる。溶岩流の上を歩くときは踏み抜く危険があるので注意を要する。

る。それがここでは空を埋める程の群で生息しており、鳥好きにとってはまさに天国である。

海にせり出した溶岩を俯瞰しようと、港の北側にそり立つヘイマクレフトルに登った。島北端の岩山は、最終氷期に形成された卓状火山の残骸である。氷河の底でおこる火山噴火は、テーブル状をした独特の形の火山を造り上げる。ヘイマクレフトルはその中で最も高いピークである。ヘイマクレフトルのとなりのリトラクリーフ (Litaklif) は、周りに急崖をめぐらせた高さ約二百メートルの平頂峰であるが、その地形から最終氷期には、この付近が現在の海面から二百メートル余りの厚さの氷床におおわれていたと推定される。当時、アイスランド本島には島の南東部に中心を持つアイスドームがあつて、中心部の高さは千五百メートルに達していたと考えられている (森脇ほか、一九九二)。ヘイマエイはそのアイスドームの南端に位置していたことになる。

強風を避け、山腹の窪みでくつろいでいると、すぐ近くを口いっばいに小魚をくわえたパフィンが、両足を広げてバランスを取りながら風に乗って巣へ帰ってくる。ペンギンの体型を連想させる丸っこい体で、一見無器用そうな飛び方ではあるが羽音を立てながらすごいスピードで飛び去ってゆく。

数百年も前から、ヘイマエイでは急な岩場に営巣する海鳥の卵を長いロープにつり下って採取してきた。食料の不足する離島では、海鳥とその卵は重要な食料源であつたのであろう。

パフィンもまた食料として捕獲されてきた。その羽毛は他の海鳥の羽毛とともに、一九世紀には主たる輸出品となっていた。フルマカメやウミガラスなどの海鳥は、一九三〇年代まで食用として捕えられ、油は灯火用につかわれた。今でも子供のためにロープを使った岩登りの講習会が毎年開かれ、伝統的な採集方法が後世に伝えられている。パフィンの捕獲は実に簡単である。急な岩棚の営巣地近くに石積の

シェルターを作って身を隠し、飛んで来るパフィンを捕虫網のような大きい網で捕獲するのである。つかまえたやつは、首をひねるか岩にたたきつける。現在でも捕獲は続けられているものの、本島との間に毎日フェリーが周航している今、それは食料源としてよりもスポーツか娯楽として残されているに過ぎず、むしろ海鳥は保護する方向にある。



港にパフィンの幼鳥を放しにきた少女たち
パフィンのあつかい方は手なれたものである。「可愛いでしょ」とわざわざ見せにきてくれた。「食べないのか」と聞くと怖い顔になった。

町にある数軒レストランでは、ウミガラス (日本のウミガラスはオロロン鳥とも呼ばれ、天然記念物になっている) とともにパフィンの肉を提供している。ソテーとスモークの二種の料理法がある。街のレストランでパフィンのソテーを試してみたが、いかにも食肉性の海鳥の味で美味とはいえない。臭みがいやなら、むしろスモークしたもの

がよいのかもしれない。これで千二百アイスランド・クローナは決して安くはない。しかし日本では絶対に食べられない代物であることだけは確かである。

このパフィン、島の子供たちにとって身近な友達でもある。幼鳥が電灯に魅かれて夜に町なかに飛んで来る。その多くは壁や電線に衝突し傷ついているため、元気になるまでの数日間、子供達のペットとして飼われる。その数は毎晩数十羽にものぼるという。元気になったら海へ放すことになる。ヘイマエイの港近くの海岸では、放鳥する子供達や家族づれが頻繁に見られた。ハト位の大きさで、まだ親鳥のように顔からくちばしにかけての鮮かな白、黄、オレンジの色彩もあらわれない。島外からの観光客用として料理される以外には、家庭ではあまり食べていない模様である。

アイスランド自慢

パフィンを食べようと思ったレストランで中年の姉妹と同席した。お世辞にも綺麗とはいえず東洋人が珍しいのか、一緒のテーブルにと誘われた。四五才と四四才の姉妹である。夫は漁にでも出ているのであろうか。

スカンジナビア女性には抜けるような白い肌と金髪の持ち主で、しかも長身で足が長い。二メートルもある大男が隣に立つと、股は私の胸の高さにまで達する。したがって北欧と旅して困ることは男子用トイレである。つま先立ちして何とか用を足していると、つくづくみじめな気分になってしまう。金髪はともかくとして、色白でプロポーションが良いとなれば、美人の条件の半分は満たしていると言っても過言ではあるまい。

「十人のうち七人まではひとかどの目の肥えた男をも通りすがりに振りかえらせる。この七人のうち五人には美人という形容だけでは足りない。この五人のうち三人は聖者をも地獄に墮しかねない」とまで

フランス人に言わせたアイスランド女性である。

漁師のカミさんという雰囲気でもないが、残念ながら「十人のうちの七人」にはおそろく入らないであろう（と私は思う）女性と、親しく歓談する機会を得ることになった。

例によってどこから来たか、これからどこに行くのか、島をどう思うか等々の質問を矢継ぎ早にあげかけ、アイスランドの自慢話になった。

「アイスランドの自然は素晴らしいでしょう」

「とくに水のきれいなこととそのうまさは世界一、実際に試してみなさい」

とわざわざ水を注文してウェイトレスに持ってこさせる（もちろんタダ）。

ヘイマエイにはわき水が一ヶ所しかなく、かつては天水を溜めて生活用水としていたのだが、一九六八年に全長二キロメートル、海底部分だけでも十三キロの上水のパイプラインが完成し、本島から送水されてくるようになった。だが昔を知る老人のなかには、今でも雨水を溜めることを止めない者もいて、地下水槽が残されている住宅がけっこうあるらしい。

「なかなかうまい。日本の水だって水道から直接飲めるし結構うまいんですよ」

という、ロンドンやパリ、デンマークなどの水を知っているという彼女等は半信半疑の様子である。

そういえば別技篤彦の『理解されない国ニッポン』には、カナダの中学校の社会科の教科書に載っている次のような記述が紹介されている。

「（日本の）レストランでは、一杯の水を飲むのにブドウ酒と同じ値段を払わなくてはならない。雨の日には水を集めるため、各家庭からバケツを持った人びとが出て道にあふれる。会社勤めのサラリーマン

たちは、自分のデスクのなかに水着をしまっておき、雨の日にはそれを着て戸外で水浴をするのである。」

日本なんて国は、「コウガイ」という国際語を生み、所詮はスモッグと工業廃棄物で完全に汚染された国だと思われているのだから無理もない。

そして話題は文学へ。

「ミシマとカワバタは読みました」

ときた。さすがアイスランドである。アイスランドの文化の最大の特徴が文学の創作といわれる。浅井（一九七三）によれば、出版点数当りの人口は、アイスランドでは四六六人であるのに対し、デンマーク、千百六人、ノルウェー、千五百五十八人、イギリス、三千二百五人、アメリカ、一万二千四百九十七人である。北海道と四国をあわせた程の面積の島に住む国民は函館市の人口より少ない。そんなちっぽけな国なのだが、人口当りの書物出版数は恐らく世界一であろう。

この伝統はアイスランドが拓かれた時から、連綿と受け継がれてきたものである。アイスランドには、主として十三世紀頃を中心に書かれた「サガ」という朗読用の散文文学がある。サガ（アイスランド・サガ）こそ歌謡集「エッダ」とともに、アイスランド人の誇りである。

内容は様々であるが、植民時代のヴァイキング活動、人々の実生活などがリアルに描かれた膨大な散文作品群で、中世ヨーロッパで自国語の散文をもってこれほど多くの記録を残した例は稀有といわれる（谷口、一九七九）。創作や後に加筆された部分を含むものの史料価値は高く、たとえばエリックの一派が北アメリカに到達した史実などは、サガのなかの記述から知られるようになったものである。

「サガを知っていますか」

「ええ、日本でもアイスランドのサガは訳されて出版されていますよ」

というと、目もとび出んばかりに驚き、次に満面の笑みを浮かべた。

しまった、と思ったがもう遅い。サガという古い文学があることを知っていただけで、読んだこともないし、内容についてもほとんど無知である。

「あなたは読みましたか」

「これを機会に読もうと思う」などと情けない答しかできない。

現在も学校で教材として使われているというサガについての解説が始まり、さらに話題は古い言語構造を残しているため、言語の化石ともいわれるアイスランド語に及び、それが「世界最古」の言語で、非常に美しい言葉であること、アイスランド人はみなサガとアイスランド語を誇りにしていること、さらに九三〇年、世界で初めての民主議会、アルシンクを持ったことなど、長い講義を聞かされることになってしまった。

あまりうまくないパフィンの肉を口に運びながら、自国の文化に対する自信と高い誇りを持ったアイスランド人の一面を垣間見ることができたような気がした。

レイキャヴィーク行きの飛行機は午後である。空港に向う途中、島の西海岸に沿って散策した。この付近は約五千年前に流れ下ったヘルガフェットルの溶岩に覆われた台地で、緩やかに起伏する溶岩の原は海岸では数十メートルの断崖となつて海に落ち込んでいる。ここの溶岩もパホイホイで、日本では見たこともないような見事な縄状溶岩が方々に見られる。そして起伏の高い部分は溶岩塚と呼ばれるドーム状の地形で、溶岩流内の融解部分に圧力が加わることによって形成されたものである。ドームの中心部分は割れており、なつかしいカルメ焼きを連想させる。

溶岩の原は牧草地となっており、石積みの垣根で仕切つてある。ヒツジは今、島の北部の卓状火山に放たれているが、季節が進めば下ろされてくるのであろう。急な崖は人がヒツジを抱いておろすのだそう

である。

リンドウやイブキジャコウソウの仲間と思われる赤紫色の花が咲く草原に寝転がって最後の時間を過ごす。アイスランド低気圧に向って吹き込む東寄りの風は相変わらず強い。南方を見れば、海上にはスーズルエイ (Suðurey) からヘトリスエイ (Hellisey)、そしてスルスエイへと火山島が南に向って一列に並んでいる。この列こそレイキャネス海嶺の頂を連ねた線である。近い将来、またこの線上のどこかで「火

のカーテン」を伴った噴火が起こるのであろうか。

「アイスランド語は、古代ゲルマン語の形態を残してしており、特殊文字が使われているし、発音も特殊であるため、英語、独語式の読み方、発音では正しくないことが多いといわれる。そこで地名・人名の日本語表記については浅井ほか(一九八〇)と熊野(一九八三)に従ったが、不明のものについては言語の綴のままとした。」

参考文献

- 浅井辰郎(一九八〇)「アイスランド」藤岡譲二編『世界地誌ゼミナールIVヨーロッパ』、二五〇―二六一、大明堂。
- 浅井辰郎・森田貞雄(一九八〇)『アイスランド地名小辞典』帝国書院、八八ページ。
- 熊谷貞治・田中耕平・幾志新吉(一九八四)「昭和五八年三宅島噴火による火山災害」国防防災科学技術センター研究速報、第五十一号、二九―六二。
- 熊野 聡(一九八三)『北の農民ウアイキング』平凡社、二四四ページ。
- 谷口幸男訳(一九七九)『アイスランド サガ』新潮社、八六二ページ。
- 中村一明・宝来帰一(一九七三)「アイスランド―裂けて広がる変動帯―」上田誠也・杉村新編『世界の変動帯』、九一―一〇四、岩波書店。
- 中村一明(一九八二)「溶岩流の災害―アイスランドの水冷作戦―」地理、二六―六、七一―七七。
- 別技篤彦(一九八八)『理解されない国ニッポン』祥伝社、二三二ページ。
- 森脇広・岩田修二(一九九二)「アイスランドの水河作用とアイススタシー変動」第四紀研究、三一―四、二二九―二四一。
- Bardarson, H.R. (1991) 'Ice and Fire—Contrasts of Icelandic Nature—' Hjalmar R. Bardarson, Reykjavik 244 pp.
- Scudder, B. (1990) 'Westman Islands' Iceland Review, Reykjavik, 48 pp.
- その他の参考資料
- Hotel Þorshamar (Vestmannaeyjar) のパンフレット(英文A四版、八ページ)。ヘイマエイ島の歴史、噴火の様子などコンパクトにまとめられており、島の概要が解りやすい。
- アイスランド地質図(五十万分の一)一九八九年版、アイスランド自然史博物館・測地学協会(Icelandic Museum of Natural History and Geodetic Survey)発行

(札幌大学女子短期大学部教授)